

令和6年度第2回岡山市総合教育会議

日時：令和6年11月19日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時30分 開会

○司会 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和6年度第2回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 よろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 じゃあお願いいたします。

○司会 はい。傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願いいたします。

○市長 それでは、次第に進みまして、議事を進めたいと思います。

本日の議題は、「端末の「活用率向上」から「効果的な活用」に向けて」と「不登校児童生徒の支援のための取組について」の2つであります。それぞれ教育委員会から報告をしていただき、それらを踏まえて、今後の課題や取組の方向性などについて議論していきたいと思います。

協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めての出席となる中島教育委員がいらっしゃいます。一言ご挨拶をお願いいたします。

○中島教育委員 9月より教育委員として務めさせていただいております中島と申します。前任のアイスライン石井様より、経済とか経営者という部分で後任として務めさせていただいております。私個人といたしましては、株式会社長谷井商店というかまぼこ屋を営ませていただいております。

教育というほどでもないのですが、私自身といたしましては、息子がもう32なので、小学校から中学校、その後20年以上なのですが、芳泉学区で地域ボランティア

として、開かれた学校づくり委員会として、子どもたちと旅をしたり映画会をしたりと年間行事をさせていただいておりました。また近年では、私が携わっていることで、岡山水産物流通促進協議会といいまして、岡山の水産物、お魚とかの、最近食べられなくなったお魚とかそういった魚食文化を子どもとか岡山の方に普及していこうという活動もさせていただいております。その中で、「海と日本PROJECT」で子どもたちと合宿をしたりという部分で、子どもたちに携わる活動も少なからさせていただいておりますので、そういった部分も含めて何か私自身が勉強させていただければありがたいなと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

○市長 よろしく願いいたします。

それでは、議事を進めます。

前回に引き続きまして、岡山市中学校長会の佐藤会長、また岡山市小学校長会の半澤会長にもご出席をいただいております。よろしくお願い申し上げます。

まずは、協議事項1「端末の「活用率向上」から「効果的な活用」に向けて」です。

資料について、教育長から説明をお願いします。

○教育長 それではまず、資料1をご覧ください。

端末の日常的な活用を目指して、これまで、1日1回は端末を授業の中で使うこと、様々な教科で使うことを目標に取り組んでまいりました。

令和4年と令和6年4月の全国学力・学習状況調査の児童・生徒が回答したICT活用の状況を見ると、活用率は上がっているのですが、全国平均よりも低い状態でございます。主な要因として、ICTを活用している学校と活用していない学校の差が生じていること、学校ごとに異なるソフトを試験導入しているため事例の共有が難しいこと、ICT操作に不慣れな教員もいることなどがあると思います。

そのため、今年度から、岡山市共通のデジタルA Iドリルと授業支援ソフトを導入し、4月から全教員を対象にした研修を実施したり、専門知識のあるICT支援員から授業提案を受けたりオンラインで相談できる場を設定したりしました。その成果もあってか、7月に実施した市の独自調査では、小学校6年生で43.8%、中学校3年生で26.2%と、3か月で活用率が向上していることが見えてきました。

活用率の向上に合わせて、授業の中で、子どもの主体的な学び、そして考えを深める活動が増えているように感じました。結果として、授業の質の向上も見られるようになってまいりました。

今後は、活用率の向上を引き続き進めていく中で、より効果的な活用という面から端末活用を進めていきたいと考えております。

現在、新たに実施しているのは、市内先進校による授業公開の実施と、全国の活用事例を基にした授業提案、実践事例の作成、収集、提供であります。

市内先進校による授業効果については、次の2枚目、参考資料1-1をご覧くださいませ。

端末を効果的に活用した授業を参観すると、個別最適な学びと協働的な学びを実現しようとしている児童・生徒の姿を見ることができます。

全国の活用事例を基にした授業提案の一例として、3枚目、参考資料の1-2をご覧くださいませ。

授業支援ソフトをどのように授業の中で使用すればより効果的な活用になるかを示しており、教員が授業構想を考える際の参考となっております。

より効果的な端末活用が進むと、子どもは、短時間で多様な考えの共有をしたり収集した情報を整理してまとめやすくなったりする端末の利点を生かし、主体的に学び、考えを深められると考えております。これにより、記述式問題の正答率の改善が図られるとともに、全国学力・学習状況調査から分かった学習の課題への解決を図ることにもつながると考えております。

説明は以上です。ご協議をよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

それぞれのご意見をいただきたいと思いますが、最初に私よく分からなかったもので、質問させていただきたいと思います。ICTの活用率の向上が記述問題の正答率の改善にどうしてつながっていくのですか。

○教育長 ICTの活用で、自分の意見を書くということが、手を挙げる形の発表ではなくて、それぞれが書くことになっています。考えが浮かばない子については、他の児童・生徒の考えを見て、参考にして書くと。その中で、書く活動の中で、記述式の問題にも抵抗感がなくなっていくと考えております。

○市長 無回答率が何らかのことを書くってということにつながるというのは、それが正答率にもつながっていくということですかね。

○教育長 そうですね。やはり何か書くということは、無回答率にも大きく関わるので、市長のおっしゃるとおりだと思います。

○市長 意見をいただきたいと思いますが、参考資料の1-2の「戦国の世から天下統一へ」っていうのは伊島小学校で見させていただいたものでありまして、思い出されますが、取りあえず校長会の会長さん方2人に実態をもう少しお話しさせていただいてから、4人の委員の先生方にお話を聞きたいと思います。

○佐藤中学校長会長 本校の実態を挙げさせていただきますと、この共通支援ソフトを入れていただいたおかげで、若手のほうが非常にスムーズな導入ができていて、若手の導入している授業を見て、ちょっと経験を積まれた先生も、こういうところでこのソフトを使えばいいのかということで、教員の中でも使う広がりが出ています。

それから、子どもの中でも、実は、先ほど書くことについては言われたのですが、国語の教員から、クロームブックを使って、子どもが作文に対する抵抗力が減ったと、実際自分の手で書くよりは入力していたほうが書きやすくなったということで、取り組みやすさが広がり、使ってみてよかったという声を聞いております。

○市長 ありがとうございます。

では半澤さん、お願いします。

○半澤小学校長会長 本校のほうでも、やはり共通支援ソフトを導入していただいたことで大きく進んだと考えています。昨年までは、それぞれの教員が個別に、自分の得意なソフト、使いやすいと思っているソフトを使っていたところが否めません。ところが、今年度から全市共通で入れていただいて、それがやっぱり苦手な教員にとっても、これは全員で取り組まなければいけないという雰囲気にもなりましたし、夏休みを中心に教員の中で得手な教員が中心になって講師役として模擬授業を行うというようなこともやっています。

子どもたちのほうですけれども、本校は思考ツールの一つとしてこの端末のソフトを使っています。総合的な学習の中で、鹿田地区の環境問題として、水をいかに使わないで節約できるかを子どもたちが考える活動をしています。その中で、自分にできること、みんなにできること、早くできること、それから時間がかかることというようにいわゆる座標軸を決めて、それで子どもたち同士が意見をもち寄って、端末上で、どれが一番ふさわしいかを考えることもやっています。

一番いいなと思ったのは、今まで、先ほどの教育長の話にもありましたけれども、手を挙げた子の意見というのは授業の中で反映をされるのですが、端末の場合、手を挙げない子の意見もきちんとそこの中に乗っかっているのですよね。なので、全員が全ての子ども

の意見を見ることができるっていうのがすごく大きいなど。全員が全て授業に参画しているし、そのことを共有できるというところが非常に大きいなどと思っています。

○市長 ありがとうございます。

このテーマはなかなか意見というのも言いにくいところもあるのですが、取りあえず委員の皆さん方、ICT絡みで何かお話しいただけることがあれば。

では上西さんから、お願いします。

○上西教育委員 今ちょうど佐藤さんから、手で書くよりもタイプのほうが書きやすいというのは、はっと今思ひまして、私も仕事柄、文章を書く仕事ですので、確かに鉛筆で書けと言われては書けないなど、そういう効用は確かにあるかなと思いました。

あと、この関係でいえば、先日も中学校の授業の訪問をさせていただいて一番私を感じたのは、各生徒がきちっと授業に参加をしていると。ちょうど市長が近くにおられて、いや参加せざるを得ないのだよとかいうことを言われて、そうかと私は思ったのですが、手を挙げた子だけではなくて、みんなが参加して打ち込んで、ある程度は間違っても恥ずかしくないしというところが本当に一番効果的だなと感じました。先ほど言われたように、多様な意見を見ることができるというのも本当に意味があって、自分では考えてなかったことにいろんな意見を見ることができるということ自体に価値があるのかなという印象をもちました。

○市長 それでは、よろしいですか、門原さん。

○門原教育委員 私も伊島小学校と福浜中学校に行かせていただきました。非常に児童・生徒がスムーズにまず機械が使えるということに本当に感心しましたし、書くというよりも、自分の考えをもつということができているので打ち込めるのだと思うのですが、それを参考にしたり、自分もさらに意見を深めたり、皆さんの意見を知ることができるので、そういう良さがあるのかなと思います。

伊島小学校では展開のところで活用されていて、まさに主体的で対話的な深い学びのところが効果的で、これがノートだったら大変だったろうなと本当に思いました。ノートだったら、いちいち広げて自分の意見を書いて、みんなでまとめると思うのですが、それが画面上でできておりましたし、福浜中は導入のところで活用されていて、生徒さんが興味関心をもってその教科に取り組まれていたということで、非常に効果的だったと思います。かつ、従来から大切にしている黒板とかノートとかも併用してくださっていたので、不易と流行というか、それに飛びつかずに、昔からあるものも大切にされながら授業を展

開されているということが見てとれて、非常によかったと思いました。

これを継続して行ってほしいということと、地道に広がって、どの学校でもこういうことが行われていると思うのですが、さらに広がっていくことと、もう一つ欲を言うと、アウトプットのところが、私たちもできないのですけれど、やっぱり見ながら言う。聞き手を意識できなくて、物を見ながら言うということが、自分の意見がもてたら、次は自分の言葉で何か参考にしながら言えたらいいなと思います。聞き手もしっかり相手にうなずいたり反応したりしながら聞くということができると、もう少し授業が盛り上がっていくというか、これは欲ですけれども、そこまで行くとすごくICTの活用がされているという感じを受けました。

○市長 今の門原委員の後段はそのとおりだと思うのですが、各学校も岡山市内の全小・中学校が同じようにやっているという認識でいいのでしょうか。

○佐藤中学校長会長 はい。

○市長 島田さん、何かあれば。

○教育次長 当然、活用を高めていますので、同じように進めさせていただいているところでございます。ただ、子どもの実態によっては、習得している部分については差があると思うのですけれども、一斉に今導入を高めていっているのです、同じような状況だと思っています。

○市長 ありがとうございました。

では片山委員、お願いいたします。

○片山教育委員 私も伊島小学校に見せていただきに伺ったのですけれども、イメージとしては、みんな画面に向かっていっているのかなっていう、そういう懸念があったのですけれども、画面に向かいながらも、お互い意見を見ることができるので、そこで対話が生まれていて、自分から言い出せなくても、書いているのでほかの人から見えて、質問したりとか、会話を引き出ししたりしてもらえ、そういう機会にもなっているなと思いました。

あと、いわゆるオンラインでの学習と、それから従来型の対面型の、みんな発表するときには前に出て大画面を操作しながら、プレゼンする子どもと操作をする子ども、2人出ていたりして、前に出ていくこともそんなに抵抗がないのだなということもびっくりしました。いい意味で本当にICTを活用してくださっていたりすることを拝見することができました。

あと一点、先ほど伺った、若手の先生がすごく上手にお使いになられるので、それをま

たベテランの先生方に教えていかれるというか、どちらかというといつものはベテランの先生に教わるということがきつと多いと思うのですが、そのあたりで先生方の間でも対話が生まれることによって、日頃聞きにくいことをちょっとそのついでに聞かせてもらうみたいな、いい意味でのギブ・アンド・テイクが広がっていくことによって先生方の対話も広がっていったらありがたいのかなということを思いました。

○市長 佐藤さん、半澤さん、今、先生方の中での議論、若手からベテランへという、そういう知の移動というのはやっぱりありますか。

○佐藤中学校長会長 はい、あります。実際に、本校で新採研の授業がありまして、美術の教員がした授業が本当にICTを上手に活用した授業でした。その後の反省会の中で、今までだったら恐らくその教員に対する指導があるのでしょうか、まずはICTを上手に使っていることとか、どうやってそれができたのかとか、それを広めたらいいねという話のできたので、恐らくいろいろな教科で広がっていると思います。

○半澤小学校長会長 小学校でもやはりベテランと若手の間の交流がどんどん進んでいるなと思います。ベテランは私の年齢に近いような学年主任さんから、若手は大学を出たばかりの先生まで広がっているのですけれども、やっぱり今までの経験知としてタブレットを使ったことが少ないですので、どうしても今までのチョークと黒板に頼るような授業が中心になっています。けれども、若手はもう大学の頃からそういうことに慣れていていますので、特に小学校は同じ教科をやっていきますから、学年団で若手がベテランの先生に、先生こうやったらもっとうまくいきますよとか、導入はこういう工夫ができますよっていうようなことが話し合われている姿をよく見ます。

○市長 中島委員、お願いいたします。

○中島教育委員 ちょっと教育のほうとは違うかもしれないのですが、実は私、岡山市さんのAI・IoT最新先端技術の活用補助金に採択されまして、先日は成果報告会でも発表させていただいたのですが、今やっぱり仕事の中でも、50代、60代の方はDX化といっても苦手です。どのビジネスでも、パワポのプレゼンでも何でも必ず必要なことで、企業としても、特に私どものような中小企業にとっては、それができる、できないで生産性も違いますし、結構企業の生命線でもあったりするので、私も先日伊島小学校を拝見させていただいて、小学生が楽しくああいう技術を学ぶということが、多分10年後には22歳ぐらいになっていますから、すぐ社会で活用してくれれば、本当に私のような地方の中小企業もすごい力になるなというのを実感しました。小学生からああいう学びをされる、そ

れを小学校、中学校、高校と継続していただいで実践につながる、これが本当に社会の仕事につながることであるということも子どもたちが知っていただければ本当にいいことだなというのを実感しました。

○市長 ありがとうございます。

私の感想も言わせていただきますと、上西委員がおっしゃったことと同じような話なのですが、全員参加せざるを得ないというか、あれは大きいですよ。テーマによって、それをもう当然ながら知っている子もいるでしょうし、全く興味のない子もいる、それなりに学ぼうという子もいて、3種類ある。また、その子どもたちの性格によって、生真面目な子、そうでもない子、2種類とすれば、6種類の人たちがいると。その全員がとにかく参加しない限り総数が合わない、これはすごいですよね。ああいうことになるとクラスの一体性みたいなものも湧いてくるのかなという感じがいたしました。先ほどの門原さんのご意見にもあったように、これをうまく各学校が使っていく、そこにおいて差がないようにやっていくということが取りあえずの我々のミッションなのかなという感じで、やらせていただければと思います。

それでは、次の問題はなかなかちょっと深刻な問題でもあるのですが、「不登校児童生徒の支援のための取組」、教育長からお願いいたします。

○教育長 それでは、資料2-1をご覧ください。

まず、不登校の定義の確認を最初にさせていただきます。病気や経済的理由を除いて、何らかの心理的、身体的あるいは社会的要因・背景によって、登校しない、あるいはしたくともできない状況にある児童・生徒を指すと定義されております。

岡山市の不登校数ですが、全国同様、増加傾向ではあるのですが、全国と比較して緩やかな増加にとどまっております。その出現率は、政令市20市において2番目に低い数値であり、岡山市の取組に一定の効果が出ているとも言えます。

岡山市では、新規不登校を抑制することで不登校児童・生徒数の減少につながると考え、教育大綱の目標値を、新規不登校児童・生徒数の出現率を0.47%に抑えるという目標値を設定しておりますが、令和5年度の結果では残念ながら未達成でございます。中段右のグラフを参考にさせていただくと、新規不登校児童・生徒数の出現率が全国と比較して令和3年度から開きが見られるのが分かります。

実は岡山市では、令和3年度から、不登校が理由で年間10日以上欠席した児童・生徒を対象に、個別の支援計画の作成を学校にお願いしております。個別の支援計画とは、児

児童・生徒ごとに不登校になったきっかけや継続理由を的確に把握し、その児童・生徒に合った支援策を策定するもので、関係機関との情報共有や小・中の接続時の引継ぎに有効とされており。また、支援の進捗状況に応じて、児童・生徒や保護者の思いを酌みながら、定期的に支援計画の内容を見直し、組織的、計画的に支援を継続させるために作成するものであります。

新規不登校児童・生徒を抑えるために、個別の支援計画を作成し、その計画に基づく具体的な支援を行うことが効果的であると分析しております。したがって、個別の支援計画の作成率の向上を目指すことが、中間的な指標の一つとして、個別の支援計画に基づいた個に応じた支援を徹底することにしたいと思っております。

資料2-2をご覧ください。

これまで、第2期教育大綱の目標を達成するため、次の取組を進めてまいりました。3点あり、関係機関との連携による学校への指導助言や支援の充実、校内の別室を活用した校内支援教室における支援の充実、岡山大学との連携協働体制の強化です。

欠席が多いケースでは、専門機関と連携して支援に当たります。令和5年度、学校外の相談機関等で専門的な相談指導等を受けた実人数の割合は、岡山市の不登校児童・生徒1,633人のうち約43%であります。専門機関と連携することによる主なメリットは2点挙げられ、1つ目は、専門的な支援を受けられることであり、2つ目に、専門機関でのアセスメントを基に個別の支援計画を見直し、ブラッシュアップできることにあります。

そのため、相談機関等で専門的な相談指導を受けた児童・生徒の割合の向上を目指し、学校の取組を評価する指標としてはどうかと考えております。ただし、不登校の全てのケースで専門機関と連携するわけではないので、設定数値は吟味が必要であると考えています。また、学校外の機関を紹介する際、児童・生徒や保護者のニーズに照らして提案するなどの配慮も必要となります。

専門機関によるアセスメントも取り入れた個別の支援計画の見直しを行い、個に応じた支援のトライ・アンド・エラーを繰り返すことで、児童・生徒本人にとって、より有効な支援を実施できると考えております。その結果として、新規不登校数が抑制されたり、学校内外で安心して学べる居場所が確保できたりすると考えております。

なお、次の参考資料2-1に、不登校などの支援に必要な児童・生徒の個々のニーズに応じた居場所確保に向けた取組の全体像をお示ししております。上段は、学校における学校内での居場所を掲げております。まずは、どこの学校もこの学校における居場所を探っ

ていき、子どもがどこかの場所で居場所となればいいなと考えますが、そこでもなかなか居場所ができない場合、下段になりますが、学校外における居場所を探っていくということになるかと思えます。

また、参考資料2-2には、先日国から発表された令和5年度の問題行動等に係る調査のうち不登校に係るものをお示ししております。

以上、ここ数年の不登校児童・生徒の推移から見えた取組の効果と今後の方針及び学校の取組を評価する新たな指標についての提案をさせていただきました。ご協議をお願いしたいと思います。

○市長 こちらのほうは若干深刻であります。全国並みとまでは行っていないのですけれども、やはり着実に不登校が多くなっている。一体何が原因なのか、それも多分子どもたちによってはいろいろと差異があるだろうと思えます。そういった実態を校長会のほうから教えていただいて、その対応を今教育長が話をされましたけれども、それでも新たに付け加えることがあればそこを教えていただいて、あとはまた委員の皆さんとも議論させていただきたいと思えます。

よろしいですか、佐藤さんから。

○佐藤中学校長会長 中学校の実態ですけれども、原因というのは本当に様々でございます。友達関係というのもやはりいろいろな、月に1回、教育支援、教育相談の係会をしているのですが、そこで出てくるのは友達関係というのが1つあるのかなということと、小学校のときは行きにくかったのだけでも、中学校になったのをきっかけに頑張ろうとして来ているお子さんが、やはりだんだんエネルギーがなくなってまた休むようになってしまうということがあったりとか、それから勉強のことでちょっと来づらくなったりしているということが大体大きいところですが、残念ながらこれとって理由をつかめないというお子さんも実際にいるので、そこは担任が家庭訪問しつつお話を聞きながら、どういう手だてができるかなというのを探っている状況です。

○市長 友達関係というのは、孤立をするということですか。それか、いじめに近いようなものがあるということなのか、そのあたりはどんなイメージなのでしょう。

○佐藤中学校長会長 関係をつくるのが下手で、仲よくなっていたのだけれども、あまり踏み込まれ過ぎたら心を閉ざしてしまったり、そのまま学校に行かないとかいう、その子その子によって違うのですけれども、その子が自分で閉ざしてしまう場合と、グループの中のトラブルから行けなくなるという場合と、本当に様々です。

○半澤小学校長会長 小学校でも今、不登校の子どもたちが増えてきています。理由として、これだというのが正直つかみ切れてないというのがこの問題の悩ましいところだと思います。今、中学校の佐藤先生が友達関係というようなことを言われましたけども、小学校だと、集団自体になかなかなじめないお子さんがいるということもあります。それから、だんだん学年が上がっていきますと、学力不振になったりすることもあります。

それから、これは私の経験の話なので、一般的にどうかというのはちょっと難しいのですが、保護者の方の価値観が随分多様化したかなと思います。学校に無理に行かなくても何とかやっていけると考える保護者が増えているという感じはします。

それから、やはりコロナの影響はすごく大きかったかなと思います。あそこで子どもの命のために休ませるということは仕方のないことだったのですけれども、休むということに対するハードルもすごく下がったかなと思っています。そういったところが複合的に今の不登校の増加につながっているように感じています。

○市長 最初の、集団自体になじめないというのは、ずっと前から同じではないかという気もするので、急に増加している理由って、保護者の意識の問題は何となく分かるような気がするんですけどね。集団になじめない子が増えているっていうか、そんなイメージでもあるのですか。

○半澤小学校長会長 きちんとしたデータをもってないので、感覚的なところで申し訳ないのですが、やはりなじめない子どもが少し増えているような感じがします。

○市長 それはどうしてなのでしょう。

○教育長 いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 発達障害の児童、お子さんが増えているのは市長もご存じですけど、特別支援学級が増えています。知り合いの児童精神科医に聞くと、やっぱり過敏な子が増えているのは事実なようで、騒がしいとか大きい声が厳しい子もいるので、そのあたりは集団が難しい子もいるというのは聞いたのですが、それだけが全てじゃないと思うんですけど、理由は分かりませんがその数は増えているのかなと感じます。

○市長 どうしてなのでしょう。委員の皆さん方からもご意見をお伺いしながら、また議論させていただきたいと思います。

先ほどは上西さんからだったので、片山さんから。

○片山教育委員 理由がなかなか分からないって、多分我が子がなってもきっと、何でな

んだらうと思うと思うのですけれども、誰にでも起こり得ると思います。一方で、先ほど保護者の価値観の問題も言われて、文部科学省も、別に学校に行けなくてもいいということで、学校以外の居場所もたくさんつくり出しているというのも1つ追い風になっていると思います。

それからもう一つ、やっぱり私がすごく気になるのはコロナの影響。先ほどもおっしゃっていましたが、コロナで3密を避けるということで、結局、直接関わらないとか、あとマスク越しに関わるので表情もあまり見えないとか、何かそういったところで踏み込まないとか、あと学校もお休みになったり、休むことも保障されるといいますか、何か病気になってもいけないとか、逆に、家族にそういう人がいたら休む、そうすると嫌でも生活リズムが乱れるとか、そのあたりも長期化してくるとなかなか自力で戻すのも難しいとか、そういうきっかけもあったりするのかな。

あと、さっきもちょっと話題になったのですけれども、上のほうで、いわゆる学校に行かなくても困らないのではないかなと思うのですね。うちの子なんか友達と話していて、休みの日何するのって、学校を休んで、長期間インフルエンザとか、元気になっても行けない期間に何するのと言うと、やっぱり友達もゲームと言う。学校を休んでいても、オンラインでゲームをすると幾らでも学校の友達とつながることができるとなると、学校に行かなくて友達といなくて家庭に子どもが一人でもそんなに困らないということもあるのかな。そうすると、学校という場の意味というのが、ある種、寂しさから逃れられたり、付き合いたいゲームを通してだけ関わればよいというところで、自分の得意なこと、好きなことで関わるけど、そうでないところは別にいいやというところも、ある種あまり学校が強制的じゃなくなっている。保護者も、行かなくてもいいよとなってくると、何かそういうところも少し緩くなっていると言うと言葉が悪いのですけれども、割と言いやすくなっていたり自己主張がしやすくなっていたり、そういう部分もあるのかなという印象です。

○市長 そうなると、義務教育って何だという議論とか、それからあと、それでハードルが下がっていて、そのままでもいいのかという議論とか、いろいろなものに発展していきますね。

それでは、中島さん、お願いいたします。

○中島教育委員 私も、ずっと前のことから考えると、学校へ行かないということは考えられなかったというか、やっぱり学校が楽しかったですね。もちろん私、ささやかです

けど、お財布を隠されたりとか、ささやかないじめとかも受けましたけども、それにも増して楽しさがあつたので学校に行っていたという自分の体験からすると、それにも増して行かないという子どもたちが抱えている課題について、正直いろんなお話をお伺いするのはですけども、多様化し過ぎて、またそこに家族の部分があつたりとかで多様化し過ぎて一概には言えないなどは思っているのですが、いずれにせよそういった子どもを、先生方は大変だと思うのですが、やっぱりこれは個別に対応して解決していくしかないのかなつてというのが、ごめんなさい、本当に単純なお答えで申し訳ないのですが、私の感想でございます。

○市長 それでは、上西さん、お願いいたします。

○上西教育委員 大変難しいテーマで、今これまで言われているように、個別に対応していく部分がまず大切かな。その意味では、岡山市の取組の、令和3年度から、10日以上のところでは1つ基準を設けて個別の支援計画の作成を進めているというのは、データから見ても意味があつたのかなと思います。計画をつくること自体もそうですし、つくる過程で恐らく作り手が生徒をしっかり見るようになるのかなと思いますので、効果的かなと思っています。

今後の取組、指標の話でいくと、先ほど教育長から、専門的な相談指導を受けた実人数というものを1つ指標にしてはどうかということで、それ自体はいいかなと思いますが、ちょっと思ったのは、これは外へ行って専門家の指導や助言を受けるところがあつて、ややハードルが高い可能性がある。できれば、学校の中に専門家に入ってもらつて指導とか相談を受けられるような体制ができないのかなと感じたところでございます。

○市長 では教育長、よろしいでしょうか。

○教育長 上西委員がおっしゃるとおりで、取りあえず学校の外ということにしていますが、学校内でもスクールカウンセラー、相談員などがいらつしゃいます。手元にあるデータで、学校内外の機関を合算すると岡山市は52.4%、全国が61.2%ですので、今おっしゃつた提案も使えるかなと思います。なかなか外に紹介するのも難しい事案もあるので、中ではまず関わっていくというのが第一義かもしれません。

○市長 門原さん、よろしく申し上げます。

○門原教育委員 私は、子どもたちも大人もそうなのですが、コロナがあつて、人と人の距離感がすごく取りづらくなつてきているというのは確かにあつて、大学生も同じようなことです。距離感の取り方が非常に難しく、ある意味で過敏になつてきているというものもある

と思うのですが、これは何とかしないとイケないなと。

もうコロナも終わりましたので、オンラインもあるのですが、私もオンラインにする  
と空気が読めないのですよね。このときここで言うのにいちいちボタンを押さないといけ  
ないとか、今入っていいのかなとか。でも、一緒にいれば同時にしゃべることもあるし、  
表情も読み取れるし、雰囲気もあるので、先生方はされていると思うのですが、いま一  
度、学級経営とか学級集団づくりとかあのあたりで、子どもは楽しければ学校に行くんで  
す。私もそうでした。給食が楽しいとか遊びが楽しいとか、ボールの取り合いが、先にボ  
ールを取って遊んだものが楽しかったみたい。それがあるので学校の特色に合わせて何  
かみんなで1つできるようなことがあればいいのかなと思います。

やっぱり学校は異年齢の集団もあるので、ご兄弟も少なくなったり、いろんな子どもさ  
んがおられるので、異年齢で縦割り集団とかをつくることも、憧れをもったり尊敬の念を  
もったり、逆に自分の自己有用感が上学年にはあったりするので、岡山市内の施設を使っ  
て体験を増やすとか、実体験で生の教育っていうか、人と人が生で関わるということが  
とても重要なのかなと思います。

それからもう一点、先ほど上西委員さんがおっしゃった、なかなか外部に、相談に行っ  
てはどうですかといっても、やっぱり行きにくい、ハードルがすごく高い方もおられるの  
で、学校の中に来てもらって専門家がアセスメントできるような体制ができれば、先生方  
も、例えばLDなんかは分かりにくいので、そういうところは専門家が見て、こういうと  
ころはできるのではないですかと、診断に行かなくてもこういうことができそうですと  
か、そういう示唆をもらうだけで先生も安心するし、子どももできることが増えればやっ  
ぱり楽しくなるので、そういう方法をこれから開発していくとか考えていく必要があ  
るのではないかなと思います。

○市長 ありがとうございます。

私、昨日、政令指定都市の会議がありまして、そこで、湯浅さんってご存じですか。子  
ども食堂とかやっている、その方のお話を聞き、議論する機会があったのですがけれど、子  
ども食堂っていってもいろんな役割がありますよね。貧しい方への食事提供っていうだけ  
じゃなくて、今、様々な動きがある中で、子ども食堂をやると何が一番変化があるかとい  
うと、誰とでも仲よくなれるという回答が増えていくのです。

そういう意味からいくと、小学校1年生なんか不登校が増えていますが、保育園も  
どんどん増えているわけなので、そういったところに行って接触すれば、本来誰とでも仲

よくなれるのだよってという人たちが増えるのではないかなとも思うのですね。だけど、片山さんがおっしゃっているように、別に学校へ行かなくてもいいのではないかということになってくると生活習慣にもなりにくくなったりして、そういう要素が増えているような気もするのですけどね。

どうですか、実態は。校長会ないしは教育長。教育委員会のメンバーでもいいんですけど、どうするつもりなのかも含めてですけどね。

○教育長 今お話を聞いていて、時代が変わったでは済ますことができないことはあるのですが、まず1点は、門原委員が言われた、遊ぶのが楽しくて行くところなのですけど、以前は、小学校では1、2時間目の間の業間休みと給食の後の昼休みは子どもがたくさん遊んでいました。その中に、ほぼ先生も入っていました。多分——半澤先生に後で聞きたいのですが——なかなかそこへ先生が入って行ってない。やっぱり忙しくなっているのかもしれないし、若手教員が次の授業の準備をしているのかもしれない。本当は先生と子どもと一緒に遊ぶ、我々が若い時代はそうだったと思うのですが、本当に一緒にドッジボールを毎日していて、子どもたちとも楽しくやっていたのが、コロナのときは芳泉小学校では大人数が出たらいけないと言って、遊びも止めていたときがあるのです。本当に何もできなかった時代があって、遊びが楽しいというところが、今の子どもたちは公園に出る子どもが少ないという現実もあると思うのです。そこをどうすればいいか分かりませんが、しっかり担任と子どもが関わることが要るのかなと思います。

もう一つは、どこもされていたのですが、就学前の年長組と5年生の子が関わりを持って、1年生と6年生になったときに、きょうだい学年とあって、給食とか掃除のお世話に行くのですが、市長が言われたとおりで、事前に年長の子と関わっておくというのをどこもしていたと思うのですが、それもコロナで今どうなっているのかなというのが逆に心配になってきて、いろんな取組を今までしていたと思うのですが、ちょっとコロナで薄れているので、そこをもう一回改めて見直して、小1のところは、実際、参考資料の2-2のところ、小1が今年度倍ぐらい増えております。それも気になるので、学校全体で、年長組と小学校の関わりで、芳泉小学校は2月に学校体験というか、年長組さんが小学校に来て、1年生の子のところちょっと書いたり折り紙を折ったりという授業体験みたいなことを年長組がしていました。これも今コロナでどうなっているのかなというのが、実際、年長組さんが学校に来ていろんな体験してくださるのはいいと思うのですが、ただ、自分のところの学校にこだわると遠くから来ることになるので、本当に学区内の年長組さ

んいらっしゃいというような取組もあると学校に慣れて、小学校の段差がスムーズにいける方法の一つかな。まだいろんな方法はあると思うのですが、そこはみんなで議論していただければありがたいかなと思います。

○市長 何かありますか。

○半澤小学校長会長 今、教育長さんから宿題がぼんと出ましたけれども、まず子どもたちが学校に楽しみに来ているかというところですけども、行事が以前のような形に戻ってきたということは非常に大きいと思っていますし、それから業間休み、昼休み等にしっかり遊んでいるのかというお話もありました。鹿田小学校では、水曜日は掃除のない日に行っているのです。なので、ロングの昼休みにして、その日は担任も含めて外で一緒に遊ぼうとか、それから学年によっては体育館をそのときは専有で使えるようにして、子どもたちと一緒に遊べるようにしています。

それから、幼稚園や保育園のお子さんとの交流ですけども、昨年から復活させています。5年生が鹿田認定こども園さんのほうに行って、来年1年生になる子とつながりをもっていますし、1年生に上がってきたら給食のお世話だとか掃除のお手伝いにも行っています。それから、先ほどICTのところではよかったのかもしれませんが、1年生はなかなか入力が難しいですね。それを6年生がついて入力の仕方を教えるというように、そういう時間を設けたりして、1年と6年のいわゆるきょうだい学級のつながりということは今までよりも強めていこうと考えています。

○市長 中島委員も門原委員もおっしゃったのですが、学校が楽しい、どういう場合に楽しいのか。給食の話は出ましたが、給食は多分みんなあるのだと思いますけど、何が行くモチベーションになっていくのかというところを先生がよく考えていただくというかね。

これは昨日も湯浅さんとの話で出たのですが、子どもにとってみると、自分が認識されているということが重要なのではないかと。だから、今40人近く、教室でも多いところはなるわけなので、そうなるとなかなか手が届かないというのも実態なのでしょうかね。この計画をつくってやっていくというのも、それはある面、認識をしてあげることにはなるのだらうと思うのですが、計画をつくる前からきちっとそういうのができていけば一番いいのしょうけどね。言うのはやすくて行うのは難しいと思うのですが、どんな感じですかね。それぞれの子どもに対してきちっと、あなたはこういうことで頑張っ

てねみたいなことをずっと接して言ってあげるとか、そういう雰囲気というのは。私が

小・中学校で授業を見ている限りは、そういう雰囲気はあるのですがね。全員参加でうまくいっているじゃないかと思うのですが、そうでもないのですかね。

では佐藤さん。

○佐藤中学校長会長 うまくいっているところは非常にうまくいっていると思います。子どもたちがお互いを認め合うという場面があればあるほど、先生からもそうだし、友達から認められるというのも頑張れるのではないかなと思っています。

学校が楽しくなるということで、毎日が楽しいかどうかは難しいのですが、学校行事、例えば1年生だったら閉谷研修とか、2年生だったら広島研修とか職場体験とか修学旅行とか、そこに向かって、行けるようにしようね、あなたが来てくれないと困るよとかいうような声かけをすることで当日来ることができたりとか、それをきっかけに学校に来ることができるようになったりとかいうことがあるので、そういう何かしら行事とかを大切にしながらいろいろと取り組んでいるところで、やっぱり大切にされると子どもはまた続けて来ることができるなと思います。

○市長 何かありますか。

○半澤小学校長会長 小学校でもやはり同じように、子どもを認めるっていうことはすごく大切だなと思っています。

これは私の話で申し訳ないのですが、校門に立ってまして、ある女の子が、おはようございますにプラスして、いつもありがとうございますと私に言うてくれるのですよね。それは3年ぐらい前、その子がまだ4年生ぐらいのときだった話なのですが、そのことを僕はよくその当時分かってなかったのですが、校内放送でそれを、こんなことを言うてくれるお友達がいる、すごくうれしかったですという話をしました。実は後から聞くと、その子はなかなか教室に上がれないお子さんで、教室に上がる前に一度保健室でちょっといて、しばらくたって教室に上がれるタイプの子だったのですが、その声かけをしてから保健室に寄る回数が少なくなったっていうようなことも聞きました。もう何年か経っていますけど、今は全く保健室に寄らずに、ずっと教室に上がっているようです。

なので、やはり認めるとか、すごくできたことを褒めなくても、あなたがいることが先生にとってうれしいよというスタンスで子どもに接していくということがすごく要るのかなと思います。ただ、若い先生はどうしても、教えないといけないことを何とかクリアしようと毎日一生懸命やっているの、そこまでの余裕がないというところもあるとは思いま

す。校長としては、そういう声かけは必ずしようねっていうことは言っているのですが、そのあたりが十分でないというところはあるかもしれません。

○教育長 佐藤校長が言われた子どもにとっての居場所が教室があれば来ることができるのだと思うのですが、友達とうまくいかなかった時点で教室に居場所がないと思うと行きにくいかなというのが一点あって、そこは担任と学校が頑張っていけないといけないのですが、あと認識されているというのは本当にそのとおりで、この取組で、国は30日以上を推奨しているのですが、岡山市は早めに10日以上から個別の支援計画をつくります。作成したら終わりではなくて、何で必要かという、市長がおっしゃるとおりで、これは多分、各学校で一月ごとに、来にくい子の会議というか、情報の共有をしていると思います。そのときに、登校できていない子が、用務員さんまで、よく来たな今日はと言うことがあればその認識につながって、私をみんな知っているのだ、この学校では居場所があるのだ、みたいなことになると思うので、早めにこういう子どもたちの情報共有をして、先生方みんなが、廊下で見ても、今日よく来たねと言うのはやっていると思うのですよ。これがやっぱりこの支援計画をつくる意味だと思うので、そのあたりを間違えないように、つくったら終わりではなくて、つくった後の継続性というか関わりが大事、その子を認識していると思わせるような声かけが大事と思います。

それからもう一点は、学校はほとんどが授業になっているので、やっぱり授業が楽しくないと登校できないと思うので、前半の部分のクロームブックの活用はこれからひよっとしたら不登校にも生きてくるかなという期待ももっています。授業に参加して楽しい、授業に参加するのがいい、当たり前だと思う子どもたちが増えると、そこからの相乗効果で、不登校だけを考えるのではなくて全体的にいろんなことを考えて、不登校もそこに効いてくるみたいな考えでいくほうがこれからはいいのかなという気がいたしました。

○市長 教育長、また校長さん方からありましたけど、何か追加したご意見はございますでしょうか。

○上西教育委員 市長の認識というお言葉とか声かけというお話とかがあって、私がちょっと今考えていたのは、エンパワーという言葉が、私は高齢者とか障害者の分野に少し関わっているものですから、その分野では、ご本人もそうだし、支援者、ご家族に対するエンパワーという言葉が非常によく使われるのです、業界的に。そういう意味でいえば、この教育委員になって、あまりエンパワーというような言葉は聞かないなというのをふと今考えていました。ひよっとしたら、そういう意識を教員の方々ももっていただくというのを少

し意識してもらうためにも、エンパワーとかそういう言葉を少し使っていくのも意味があるのかもしれないというふうに今考えていました。

○市長 ありがとうございます。

○片山教育委員 私も、学校が楽しいということに関連して、一方で、勉強が分からないというのは残念なこと。あともう一つ、一人一人が輝ける場をいろいろな場で今頃学校では用意してくださっているなという気がします。行事でいろんな係をつくってくださったりとか、係の活動もそうだと思うのですけれども、得意を生かせるとか、自分が苦手なことだけでなく得意なことをみんなの前で披露することによって自分を認めてもらうとか、やっぱり先生とか大人が認めることよりも、多分、何よりも同級生や友達に認めてもらうということが一番力になると思うので、そういう友達に認めてもらえるいい機会だろうと思いました。

それと一点、岡山型一貫教育が私はやっぱり岡山のすごく魅力だろうなと思って、学校種間の連携というところで、子どものつながりもだし、先生方が異校種に行かれるというのはすごく大きいだろうなと思います。あと、まなプロで、それこそ卒業した学校の先生が学校に来られるらしいというのを聞くと、結構卒業生は色めき立って喜ぶみたいなんです。自分たちの立派になった姿を先生に見てほしいとか、また先生に会いたいとか、そういうところで学校の魅力だったり、自分たちが育ってきた学校の地域とかそういったところの多分よさとか、そういうことも感じるものがあったり、学校の魅力の一つにつながっていくのかなと思いました。

○市長 中原さんいかがでしょうか。ずっと子育て関係をやっておられましたから、それらも踏まえて。

○総務局長 自分たちの時代とまた今の子どもたちの時代は大分違うなというのは、お話を聞かせてもらって感じました。子どもたち、親もそうですけど、価値観が多様化しているとよく言われます。本当に、学校が全てではないと思われる方も大勢おられるのかなと。

ただ、やっぱり人間としてこれから先を生きていく基礎的な力っていうのは家庭だけでは十分でなく、学校と家庭と地域とがそれぞれ子どもに関わることで、多分、バランスの取れた人格形成というか生きていく力というのは育っていくのではないかなと思います。うちは猫の手以上におばあちゃんおじいちゃんの手を借りて子育てをしたという、多分恵まれているのかなと思っております。一人一人のお子さんの困り事、保護者さんの困り事

にアプローチをどれだけできるか、またいろんなチャンネルを開いておいてあげられるか、そんなことが大切ではないかなと、皆さんのお話を聞きながら感じておりました。

○市長 ありがとうございます。

ほかにありますか、ご意見。

私は1つ、半澤さんの言葉の中で気になったところがあるのですが、何かというと、若い先生がどちらかということやっぱ教えるほうが中心となっているように思うという話がありましたよね。そこはもちろん、経験している先生であれば、教えることだけでないよというのがより身にしみているとも思うのですが、そこは教えられる立場から見ると、別にその先生を選んだわけではないので、同じように扱ってもらいたいなど。ベテランの先生が、授業だけでなく、もっと自分のことを見てくれて認識してくれているということをやっているのだったら、若い先生も同じようにやってもらったほうがいいのではないかと思いますので、そのあたりの学校内での徹底は。

例えば半澤さんがおっしゃった、ありがとうと言う子に対してメッセージを送ったというのは、それをみんなが知るだけで全く変わるのではないかなと。そういうものを学校内で一体感、情報を共有していく、ないしはもう少し広く小・中学校の校長会で共有し流していく、何かそういう取組というのができないのか。今もあるのかもしれませんが、どうでしょうか。

○半澤小学校長会長 先ほど私の話をさせていただきましたけれども、うちの学校では人権教育の取組とも絡めて、思いやりシートというものを子どもたちから募集をしています。ちょっと心が温かくなったようなこととか、ありがたかったなというようなことを、子どもたちがA4の半分ぐらいのものに書いて、それを人権担当がお昼の校内放送で読み、そしてみんなに知らせる。もちろん毎日ではありません。

それから、若手の先生の指導力を向上させるということも、要は余裕の部分をつくるということも含めて、ある程度、学年の中で授業交換をするようにしています。若い人もそのクラスに行って、同じ教科で自分の授業を試してみる、それからベテランの先生の視点を全てのクラスにも広げる、そういうことをやりながら、先ほど市長さんが言われたように、子どもへの見方だとか関わり方ということを少しずつ蓄積しているところです。

○市長 中学校はいかがですか。

○佐藤中学校長会長 中学校は、ありがたいことに教科担任制なので、学年団というチームで当たれますので、いろんな子に対することをいろんな先生が見ることができずし、

若手の先生の困り感も学年で、他教科で授業へ行けばクラスが分かるので、そういうことはできていると思います。今、半澤校長先生のお話を伺いながら、思いやりシートはいいなと思いながら聞いたところです。

○市長 これらの点について、教育委員会、何かあります。

島田さん。

○教育次長 議論を聞かせていただく中で、子どもたちを認めていく、そういうことのできる職員の体制というのがやはり大切だと改めて感じました。

それから、昨年度、校内支援教室の状況を聞いたときに、自分たちが活動を決めて取り組むことで授業に対する意欲が増しているということもお聞きしていることを考えると、そうやって自分たちに何かができるとか、あるいは先生方や周りの友達たちから認めてもらえるというような、やっぱり自分がというところに、周りに埋没せずに、そういうような環境があれば学校がゲームとかに勝てるようになってくるのかなど。なかなか、今は残念ながら学校よりもその魅力に勝てていない状況があるのかなというのは改めて感じたところでありまして、そこをどうやっていつやっていくのが効果的なのかというのは、今日の議論を聞かせていただきながら我々も検討したいなと思いました。

○市長 教育長、何かありますか。

○教育長 皆さんの意見を伺う中で、途中でも話しましたが、不登校については個々様々、本当に出席ゼロの子もいるし、30日の子も、それぞれに学校は関わっておりますが、未然防止のところで、今後、学校全体としてどうするか、楽しい学校、島田が言いましたゲームに勝てる学校かどうか分かりませんが、やはり市全体として本当に子どもを褒めるようなことも含めて統一的に何かできると、結果的に不登校が改善されていくのではないかなという思いをもちました。

途中で片山委員が言われました岡山型一貫教育については、中1ギャップがなくなって、不登校も中学校は結構改善傾向です。小学校と就学前のところは、小1プロブレムというのがずっと言われていますが、改めて今、市教委として学校として取り組んでいることを見直して、義務教育のスタートを考え直すべきかなと今思っていますので、ここをまた今後議論させていただきたいと思います。

○市長 ありがとうございました。

何か追加のご意見はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 今日、中島さん、門原さんから、楽しいという言葉がキーワードとしてあるのではないかなど。ただ、楽しいというのが一体何なのかというところが人によっても違うだろうし、そのあたりの定義というのはすごく難しいのではないかなど。門原さんの場合は給食というキーワードだった。私はそれこそ半澤校長の鹿田小学校出身だったので、あまり授業が楽しかったという覚えがない。今もそのグラウンドが残っているのですが、そこでやっていたソフトボールとかが楽しかったなというのは。だから、そのときは惰性で学校に行っていたような気もしないでもないのですが、行っていたことがプラスになったことは間違いない。

やはり今日の議論を各先生方にどうブレイクダウンしていくのか。例えば、認識という言葉、エンパワーという言葉もありましたけども、この不登校問題というのは、私はすごく重要な問題ではないかという気がいたします。それは別のフリースクールでやればいいのではないかという話もないわけではないかもしれないが、それにしても、できれば学校でみんな勉強し、スポーツをし、遊んでいく、こういったところになれば全体としてはいいのではないかというように思うので、教育委員会のほうでこれからも校長会等々があるでしょうから、それまでに、今日の話題として不登校を教育委員会が選んだということも、これは教育委員会としても大きな問題意識をもっているということなので、全先生を通じて、保護者にもどう波及させていくのか、にじみ出していくのかということも踏まえて、新たに一回整理をしていただくというのがいいのではないかなと思います。よろしいでしょうか。

○教育長 はい。

○市長 それでは、意見も出尽くしたようですので、教育委員会においては今日の意見を踏まえまして問題解決に向けた取組を引き続きお願いしたいと思います。

最後に、この2つの議題以外で何かご意見がございましたらお願いしたいと思います。

今日報道で見ましたけど、年1回の学力テストの発表をやめていくっていうのは。

○教育長 まだこれからだと思いますが、発表の仕方を考えるようです。

○市長 そうですか。あれも1つではないかなと私も思ったのですがね。あんなことで一喜一憂するだけが学校ではないよっていうところもあるし、標準的な学力はもってなければならぬことは事実だと思うのですが、またその状況なども分かりましたら教えていただければと思います。

よろしいでしょうか、今日のところは。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 それでは、本日の協議はこれまでといたします。

事務局に進行をお返しいたします。

○司会 ありがとうございました。

次回の会議は、改めて通知させていただきます。

以上で令和6年度第2回総合教育会議を閉会します。本日はどうもお疲れさまでした。

午後4時49分 閉会